

ブラジル特報



No.1677
2023年11月号

特集 サンパウロ AnimeFriends 20周年、 リオ・ブックフェア40周年

- ・ブラジルのアニメイベント20周年
～今や国際的ポップカルチャーに成長
- ・リオ・ブックフェアで確認されたブラジル出版業界の底力
～第21回書籍ビエンナーレを巡って

あの町この町
ブジ奥斯 Búzios

0円



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの町この町 ブジ奥斯 [窪田敏朗]	3
ブラジル・ナウ BRICS プラスとブラジル 立ち位置と国益を確保できるか [子安昭子]	5
【特集】サンパウロAnimeFriends20周年、リオ・ブックフェア40周年 ブラジルのアニメイベント20周年 ～今や国際的ポップカルチャーに成長 [佐藤フランシスコ紀行]	6
【特集】サンパウロAnimeFriends20周年、リオ・ブックフェア40周年 リオ・ブックフェアで確認されたブラジル出版業界の底力 ～第21回書籍ビエンナーレを巡って [岸和田仁]	8
慶應義塾大学国際医学研究会 第46次派遣団のブラジル体験 [魚津匠平]	10
ブラジル現地報告 シネマ・マージナルの王 オズアウド・カンデイアス [布施直佐]	12
連載・日系企業シリーズ 中南米査証専門会社として創業35年 株式会社リベルコン・ジャパン [徳田 修]	13
連載・ビジネス法務の肝 男女間における同一労働同一賃金 [柏 健吾]	14
連載・勤どころ～税務&ホットトピック～ 通関におけるコンプライアンス及び優遇制度の概要 [マルコ・クアドロス/三上智大/天野義仁]	15
エッセイ 音楽、お芝居を通じて… 日本とブラジルの物語を伝えたい [小川善久]	16
魁聖(友綱親方)の断髪式 [『ブラジル特報』編集部]	17
ジャーナリストの旅路 ブラジルで触れた「移民社会」 途切れぬ縁の始まりは足元に [戸田和敏]	17
連載・文化評論 アマゾンを再考するための必読書二冊 (復刊『アマゾン探検記』、新刊『アマゾン500年』)を読む [岸和田仁]	18
新刊書紹介	19
連載・ブラジルあれこれ Feminicídio	19



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「サンパウロ目抜き通り近くの大型書店
Livraria Cultura. 吹き抜けのスペース
に、ジャンルに分かれて並ぶ様々な本、
くつろぎ読書する人。心落ち着く照明に、
想像の世界へと誘うインテリア。ネット
と異なる魅力を放っていた」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に
写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕
成社)等。www.hikarunphoto.com

ブジ奥斯 Búzios

日本人向け観光ガイドブックに紹介される機会は少ないが、リオデジャネイロから車で海岸線に沿って東に約3時間の場所に、欧米人観光客にも好まれている小ぶりだが素敵なビーチタウン、ブジ奥斯がある。ブジ奥斯は周囲が8キロの複雑な形状の半島に、23の美しいビーチがあり、洒落たレストランやホテルが立ち並び、リオデジャネイロ州では最も人気のある高級リゾートである。

正式には Armação dos Búzios とよばれるこの町がどうして著名なリゾートタウンとなったのか？話は1960年代前半に遡り、フランスのトップ女優、BBことブリジッドバルドーの訪伯が巻き起こしたことがきっかけとなったのは知る人ぞ知る有名な話だ。

1964年1月、彼女は当時のブラジル人のボーイフレンド、ボブ・ザグリーと休暇でリオを訪れるが、至る所に報道陣、今で言うパパラッチが張り付き、嫌がらせを受けて、コパカパーナ・パレス・ホテルで急遽記者会見を行う羽目に。その後、静かなプライベートの時間を過ごすために、ボブは当時世界的には無名だが平和な漁村ブジ奥斯に彼女を連れていった。この小さな町には、当時電気もろくに通っておらず、生活は極めて田舎的だったが、半島の自然な美しさと、その素朴さが彼女のお気に入りになったという。

彼女は1964年12月～1965年1月にブジ奥斯を再訪。彼女が町にもたらした名声に感謝する意味で、彼女の名前が通りに名づけられたり、彫刻家クリスティーナ・モナによる等身大の銅像も建てられたりした。

町には小さいけれど素敵な欧州風の名画座映画館がある。彼女の名を冠した映画館、グラン・シネ・バルドーだ。館内には懐かしの著名俳優、女優の写真が多く飾られているが、ここでも一番の壁にはバルドーの写真とサインが飾られている。

現在のブジ奥斯は人口3.5万人。年間平均気温は24℃と時期を問わず爽やかで、雨も少ない。半島の西海岸のビーチは穏やかで透明度が高く、東海岸は外洋に面しているため、よりワイルドで、サーファーやウォータースポーツ愛好家に好まれている。街の中心街であるRua das Pedrasにはショッピングやレストラン、アートギャラリーが立ち並び、ナイトライフもクラブやバーもあり満喫できる。

ジェーン・バーキンやナタリー・ドロン等60～70年代に活躍したフランス女優の訃報を最近耳にする度、BBは未だ健在なのか(現在89歳)気になる、そしてこのブジ奥斯のことを思い出すのである。

窪田敏朗(協会事務局長)



広島から Tudo Bem?

4年ぶりの総会開く 名古屋・ガルボン総領事も参加

広島日伯協会は8月25日、市内のホテルで総会及び懇親会を開催した。

在名古屋総領事館のルイス・ガルボン総領事を迎え、県副知事、県内自治体の関係者ら約30人が集まった。コロナ禍を超えた4年ぶりの開催を喜び、交流や親善事業の推進を誓った。

田中会長は挨拶のなかで、現在の在日ブラジル人を取り巻く環境や、広島からの移民の歴史などにも触れ、「今年広島を訪れたブラジルの親戚と色々な話ができ、より親近感が沸いた。今後とも両国の架け橋となるべく、活動を活発に行っていく」と話していた。

ガルボン総領事は、田中会長の名誉領事の再任を祝い、その重要性にも触れた後で、移動領事館の活動を報告。「中国地方に住むブラジル人への行政対応への協力に感謝したい」などと話し、会場からは大きな拍手が送られていた。続いて行われた懇親会では久しぶりの再会を喜ぶ声も上がり笑顔の輪ができていた。



▲懇親会で挨拶するガルボン名古屋総領事

会員団体紹介

踊りで「平和」伝えよう盆ダンスでサンバを披露

踊りで平和を伝えよう。会員団体であるサンバ連合ホーザ・デ・ヒロシマは広島夏の風物詩となりつつある「ひろしま盆ダンス」のステージでステップを披露、浴衣姿の来場者を魅了した。

ブラジルには世界で唯一の常設盆踊り会場があるほか、ハワイやアメリカ本土では「BonDance」として定着している。多くの移民が移住先で伝えた盆踊りが文化融合の象徴になっていることに注目し、2018年から市の中心地で開催されている。

小畑浩代表は、「盆踊りでボルテージが上がっている中でのス

多文化共生な IZUMO 講演 島根県・出雲市から堀西氏招く

総会の基調講演として、島根県出雲市で長年活動を行う堀西雅亮氏が「出雲でめざす共生社会」をテーマに話した。

同市は人口17万人のうち、3800人が外国人でそのうち約3000人がブラジル人。官民一体となった共生が進む地域として知られる。

堀西氏は、大阪で外国人研修生・技能実習生の受入、NPO活動を通して職場における多文化共生の推進に取り組んだのち、2010年から島根県出雲市を中心に、外国出身市民に対する日本語学習支援、子どものサポートなど、「多文化共生の地域づくり」の活動に携わっている。

支援活動や日本語の習得に関しても、企業が4勤2休の制度をとっていることから、決まった曜日に参加する困難な現状を説明。

自身の体験として、教師から「君は外国人なんだから頑張らないとダメだよ」と言われた子供が「外国人だから、ではなく、君が頑張らないとって欲しかった」とこぼしていたエピソードを披露、「外国人という括りではなく、個人として認めることが大事」などと話していた。

話を聞いた会員の一人は、「自分の周りでも外国人労働者を雇用しているが、その家族や子供の教育などに思いが至っていないかった」と感想を述べていた。



優しい語り口で講演を行う堀西氏

テージ。凄い数のお客さんが手を振ったり拍手したりしてくれた。こんなに盛り上がったのは長年サンバをやっていて初めて」と興奮気味に話した。



▲浴衣でサンバを楽しむ来場者ら(8月12日)

イベントの企画や運営に携わる堀江剛史日伯協会理事は「広島にとって平和と移民は伝えていかなくてはいけないテーマ。踊りを通して平和を伝え、広島とブラジルの繋がりも伝えていければ」と話していた。



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター(県人会)と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長(6代目、2020—)は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



BRICS プラスとブラジル 立ち位置と国益を確保できるか

BRICS プラス誕生

ヨハネスブルクで開催された第15回 BRICS 首脳会議(2023年8月22日~24日)において新たに6か国の加盟が決定した。アルゼンチン、エジプト、エチオピア、イラン、アラブ首長国連邦、サウジアラビアである。4か国(=ブラジル、ロシア、インド、中国)の英語表記の頭文字すなわち BRIC もしくは BRICs という言葉がこの世に生まれたのは2001年、名付け親は米国人エコノミストであった。その後首脳会議が2009年に始まり、2011年に南アフリカ共和国が加わり BRICS となり、今後は BRICS プラスに名称が変わる。

有識者やメディアの冷めた視点

ブラジルの外交雑誌 Interesse nacional を発刊する IRICE (国際関係・対外通商研究所) のサイトには元外交官や大学教授がブラジル外交関連の記事を投稿しているが、BRICS プラスについては総じて厳しい内容であった。一言で言えば BRICS プラスはブラジルにとってマイナス、である。中国のプレゼンスがさらに大きくなることで BRICS のブラジルの影が薄くなる、ルーラの言動は1期目、2期目、すなわち21世紀初めの国際関係のロジックである、国際社会(とくにG7諸国)からブラジルは中国やロシアを支持していると解釈され、ブラジルが目指す中立や非同盟の立場ではなくなる、といった意見であった。新規加盟6か国のうち民主国家は一つ(=アルゼンチン)と喝破する元外交官もいた。

6か国加盟の経緯は不明である。ブラジルやインドは拡大には消極的であったという。首脳会議閉幕後の記者会見ではルーラも新加盟を歓迎すると語ったが、どちらかというトーンは控えめであった。「BRICS の重要性は多くの国々が加盟を希望したことからも明らかである」、共通通貨の実現に関しては「支払い手段の選択肢が増え、途上国の脆弱性が減る」と述べるにとどまった。首脳会議に合わせて開催された BRICS 諸国財界人フォーラムではアダン財務相も「BRICS は我々が参加するほかのフォーラムと敵対しない」と述べ、G7 諸国との対立感情を前面に出す中国やロシアとは異なるスタンスを示そうとした。BRICS プラスは最終的には BRICS の拡大を強く望んでいた中国に押し切られたということであろう。欧米や日本のメディアでも「拡大 BRICS は中国外交の勝利」といった論調が多く聞かれた。今の BRICS の力関係が結果を導いたと考えられる。

BRICS プラスとの向き合い方

BRICS プラスについてはすべてがこれからである。今後とも新規加盟を歓迎するとヨハネスブルク宣言では書かれているが、加盟基準を明示しなければますます BRICS の性格がぼやけてしまう。現時点では確かに中国やロシアにとって有利な外交の場となる目算は強い。しかしながらイアン・ブレマーを始め多くの論客が言うように BRICS プラスの国々は中国主導の国際秩序も欧米諸国からの分断も望んでいない。今の国際情勢(米中対立、終わりが見えないウクライナとロシアの戦争、それに伴う食糧や資源価格の高騰や不足、そして必要が迫られるエネルギー転換)の中でいかに国益を守っていくかが最優先課題である。BRICS プラスという枠組の意図はともかく、すでに国際的に認知された以上、ブラジルが今後その中でどう行動するかをみていくほうが現実的である。

BRICS プラスやルーラの対外行動について否定的な意見が多い中で、ブラジルのネットジャーナル Poder360 の社説が目をつけた。BRICS プラスの中でブラジルが立ち位置や国益を追求できるかはブラジル次第という指摘である。これまで世界の石油産出量に占める BRICS (=5か国)の割合は23%であった。今後は BRICS プラス(=11か国)になることで45%になる。天然ガスについても同様に22%から36%に拡大する。世界のエネルギー論争を引っ張る存在になるかもしれない。

異常気象やそれに伴う自然災害が各国で猛威をふるっている。気候変動対策や環境保全、エネルギー転換は BRICS プラスでも避けては通れない。その際にブラジルにとって次の2つが肝要になる。一つは石油収入で大きな強みを持つ BRICS プラスの国々の間で再生可能エネルギーの議論をどう主導していけるか。もう一つは BRICS プラス内のエネルギー転換に向け、新しい技術やイノベーションの機会をどう創出できるか、である。バイオ燃料の世界的な利用拡大に向け、米国やインドとともに「グローバルバイオ燃料同盟」が先般のインドでの G20 で立ち上がった。Our World in Data によればブラジルは総発電量に占める再生可能エネルギーの割合は87%。BRICS プラスを超え、ブラジルがグローバルなエネルギー転換に関する議論においてリーダーシップを発揮することができれば、ルーラ政権が繰り返す「国際舞台のなかでブラジルをもう一度主役にする」という目標の具体化にもつながるのではないだろうか。

子安昭子(上智大学教授)

ブラジルのアニメイベント20周年 今や国際的ポップカルチャーに成長



佐藤フランシスコ紀行
(ブラジル漫画家協会会長)

第20回 AnimeFriends

今年7月に20周年を迎えた南米最大級の日本のポップ・カルチャーイベント AnimeFriends2023 がサンパウロで開催された。開催期間は7月13日から16日までの4日間であったが、私は講演を頼まれたのでイベント初日に出かけた。実は、20年前の第一回目の AnimeFriends でも同じく講演を頼まれて参加した。当時は小学校の校庭を借りていたが数年前からアニエンビー国際展示場で行われている。今回は12万人もブラジルばかりかチリやペルー、パラグアイなど南米各国からも参加し、日本からアニソン歌手も参加して、国際交流基金も日本語教室をアピールするブースを設けた。20年前を思えばものすごく成長したものだ。でもそれだけではない。

初日は木曜日だったが、入場無料の子供たちが沢山いた。彼らは親に連れられて行っているのではなく、学校がバスをチャーターして小学生や中学生の生徒を社会科見学として参加していたのだ。制服を見ると様々な学校から来ている。普通どの国でも学校の行事として動物園とか博物館の見学は有るが、アニメイベントに生徒を連れて行くことは考えられなかった。それが今回のようにかわったということは、日本のポップ・カルチャーがそれだけブラジル社会で受け入れられているからだ。

私が会長を務めるブラジル漫画家協会は来年創立40周年を迎えるが、1980

年代にブラジルで漫画の話をして、誰も漫画やアニメと言う言葉すら知らなかった。私たちとしては最初から漫画とアニメは日本の文化として見て欲しかった。ただのファンが集まっているのではなく、日本の文化を広めていると思っていた。しかしながら当時のブラジル社会、そして日系社会も漫画とアニメは子供の物で文化だとは思わなかった。

1984年9月に漫画の神様、手塚治虫先生が来伯された。サンパウロ美術館(MASP)で展示会と手塚アニメの放映会も行われた。当時は珍しい事なので新聞やテレビでも大きく報道された。文協で行ったサイン会では外からぎっしり並んでいたが、全員日本語が読める日系人だった。ブラジルでは手塚先生の作品は知られていなかった。アウグスタ街のシーザーパークホテルで先生はアニメの専門的な話をした。この講演会にはブラジルのアニメや漫画のプロが参加していた。この方たちには少しインパクトが有ったと思うが、一般人には、私たち漫画ファンを除いて、効果はなかった。

当時の日本は円高でバブル時代を迎えていた。逆にブラジルはインフレで経済が混乱していた。その頃ブラジルの出版社が日本に行って漫画作品の交渉をしたくても相手にされなかった。当時の東京都のGDPがブラジル全国のGDPと同じ時代であったので無視されたのも当然かも知れない。また日本の大手出版社でも「国際部」などなかった時代であった。つまり、日本国内の市場で十分売っていたし、日本の文化が作り上げた漫画は外国で売れない

と思っていたのだ。1989年に亡くなった手塚先生がこれを見ていたらどう思っただろう。手塚先生の「鉄腕アトム」は日本で1963

年に放送されて同年にアメリカで放送された。先生は最初から日本の漫画やアニメは輸出出来ると信じていた。

ブラジル漫画家協会の 地道な活動

AnimeFriends が始まる七年前の1996年、ブラジル漫画家協会が中南米で初めての漫画・アニメイベントを行った。当時、車田正美のアニメ「聖闘士星矢」が爆発的にヒットしていて来場者数も多かった。私たちは日本の出版社や漫画専門学校などに何度も手紙を書いて送ったが返事は一通も無かった。日本語専門家の友人に添削してもらった手紙だったので文法的には正しい文章だったにも拘わらず、だ。漫画家協会のリオ支部長がユダヤ系でアメリカ人の様な名前を持っている。その方が英語の手紙を送ったらすぐ返事が来た。それ以来漫画家協会の手紙は必ずリオ支部長が英語で書いた。この事例からもわかるように日本の業界は外国、特にブラジルを無視していたと思う。

2022年に日本動画協会が発表した報告書によると日本アニメ産業の海外売上高は1兆3134億円であった。日本国内市場の売上規模と同じくらいだ。これからワンピースみたいなヒット作が生まれれば海外の売り上げは上がると思う。そして海外市場の特徴は作品が長続きする事だ。何年も同じ物を再放送するからでもあるが、日本で忘れられた物でも外国では売れ続けている。例えば池田理代子の「ベルサイユのばら」は、1972年の作品だが今でもイタリアにはファンが



多い。ブラジルで「ベルばら」のアニメは放送されていないし漫画は数年前にし

か発行されていないがファンはいる。漫画家協会が昨年「ベルサイユのばら50周年記念展示会」を行ったらサンパウロ以外の州からもファンが来た。最近サンパウロ市の東洋街リベルダーデ区を歩くとよく見かけるのが子供の「鬼滅の刃」コスプレイヤーだ。他の所を歩いてもコスプレイヤーは見かけないが、この子達は東洋街へ行くからわざわざ着て来るのだ。日系団体の中でも会員や理事の高齢化は大問題であるが、非日系人の子供が日本の文化に少しでも興味をもってくれる事は本当にありがたい。将来この子供たちの中でだれかが日系団体のリーダにしてくれるかと思うと嬉しくなる。たしかに漫画やアニメの影響は凄く大きい。

私が今年度から会長を務めさせて頂いている福島県人会でもブラジル人の会員が少しずつ入って来ている。最近県人会に手伝いに来ているボランティアも非日系人が多い。聞いて見ると皆子供の頃アニメに夢中になって大人になってからも日本に興味を持っていると言っている。日本語を勉強している方もいる。ブラジルの日本語学校で非日系人の生徒が半分以上になっている所があるのは当然かもしれない。

漫画やアニメの他ブラジル人に大きく影響を与えているのが特撮ヒーローである。私は東映のテレビシリーズ「ナショナルキッド」をブラジルで見て育ったが、1960年代のブラジルではテレビを持っている家は少なく、電気の通っていないところも沢山あったので、特撮ヒーローの影響が広がるのは1970年に放送開始されたウルトラマンからである。

今年11月にサンパウロ市で行われる第4回東北北海道祭りには各県人会がアトラクションを見せる事になっている。昨年、福島県人会は参加していないが、聞いて見ると秋田の民謡グループが長いショーを行い、他の県人会は太鼓とよさこいソーランで余り目立つ物は無かった。実行委員会は何か若い人を集め

るショーは無いかと悩んでいた。福島県人会としてはウルトラマンのショーを見せる事になった。ショーと言っても、歌手がウルトラマンのテーマを歌ってウルトラマンのコスプレイヤーが舞台上がるだけだ。ウルトラマンの生みの親は円谷英二監督、福島県須賀川市出身である。でもそれだけでウルトラマンが福島を代表する、というのは来場者から見ておかしいだろう。だから舞台のバックにプロジェクターを使って円谷監督の写真と歴史、そして須賀川市の駅前のウルトラマンのモニュメント、円谷博物館なども見せる予定だ。こうすれば観光振興に繋がるかもしれない。

特撮から観光へ

最近知ったのだが日本には「アニメツーリズム協会」がある。それは『機動戦士ガンダム』の富野喜幸監督が会長を務め、7年前に設立された一般社団法人である。そのウェブサイトでは日本のアニメスポットが並べてあり、福島県だけでも、ウルトラマンを除いて、三ヶ所アニメに出てくる所が有るそう。確かに海外からの旅行者はそのような場所に行き写真やビデオを撮りたいのだ。

サンパウロのジャパンハウス内に日本政府観光局(JNTO)が一つのテーブルを設けて若い職員が日本の観光の説明をしている。置いてあるチラシの数は本

名古屋のレゴランドと兵庫のニジゲンノモリ。写真を撮る場所はアニメ「君の名は」に出て来た国立新美術館のレストランと新宿の須賀神社。その近くにゴジラの12メートルの頭が有るそう。それから漫画博物館も紹介している。

日本では何でもブームになると必ず専門雑誌が発行される。アニメ観光に関しては「アニメツーリズム協会」が毎年三月に発行している「アニメ聖地88」が有る。雑誌サイズで100頁。アニメファンには大事な情報いっぱい

の専門ガイドブックだ。ちなみに、この情報は日本に行った事のないブラジル人に教えてもらった。情報が早く回る時代だから日本に行ったユーチューバーがその場で動画を投稿して世界の人々が見ている。それが新聞、雑誌やテレビよりも早くインパクトを与えている。これから先はブラジルの観光客も日本に行って子供の頃見たアニメや特撮のロケ地に行くだろう。ブラジルに住んでいる私たちは日本のポップ・カルチャーから一歩前へ出て日本文化の特質をもっと紹介していきたい。観光客には歴史にも興味を持って行ってほしい。そうしたら日本の地方観光も伸長するだろう。

ブラジル日本文化福祉協会のブラジル日本移民史料館が昨年の六月に日本のポップ・カルチャーの展示スペースを設けた。史料館は文協ビルの7、8、9階に建てられているが、ポップのスペースは9階の一部だけだ。以前は普通一日に100人の来客者も無かった所が日本のポップ・カルチャーが入ってからは700人をを超えるようになった。確かにこれはリベルダーデ区の観光を活性化している。



リオ・ブックフェアで確認されたブラジル出版業界の底力 第21回書籍ビエンナーレを巡って

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

サンパウロにおいて最初のブックフェアが開催されたのは1970年であったが、リオでの第1回ブックフェアは1983年であった。従って、偶数年はサンパウロで、奇数年はリオで、とブラジルの二大都市で隔年毎に交互に大型ブックフェアを開催するようになったのは1983年からである。その年、リオの老舗ホテル、コパカバーナ・パレスを会場に、SNEL（ブラジル出版社組合）主催のブックフェアが開催されたのであったが、今年は40周年記念の第21回書籍ビエンナーレが9月1日から10日までの10日間、リオセントロ会場で行われた。主要メディアも大きく取り上げたが、YouTubeでも様々な関連動画があがっているので、日本にいる当方もそうした画像やネット情報を通じて今年のブックフェアの熱気を感じることができた。まず、イベントの成果をみる前に、厳しい書店事情もざっくりと復習するところから入っていこう。

大型書店の経営不振・挫折

ブラジルの出版業界は、20世紀末から2013年までは右肩上がりの成長、市場拡大を謳歌したが、2014年以降は、横這いないし足踏み状態で推移してきている。そうした挫折の具体事例として業界1位2位であったSaraiva書店、Cultura書店それぞれの経緯・現状をざっと追いかけておこう。

1914年創業のSaraiva書店（創業者はポルトガル移民一世）は、法律書専門店として法学関係者を主要顧客とする堅実経営をベースに全国に支店網を広げ、1970年には株式を公開。38店舗まで広げた2008年、競合相手のSiciliano（小型店舗を61店展開）を買収して、一挙に100店舗近い巨大書店チェーン（業界トップ）へ急成長したが、巨額の借入金に頼った拡大路線は2012年をピークにマイナス成長に陥り、利益急減から赤字の急拡大へ一直線、2018年10月、民事再生を

申請する事態へ。“身売り”を3回試みたが、買い手は一社も現れなかったことから再生は難航し、今年9月20日、最後まで残った5店舗も閉鎖、従業員は全員解雇（首切り以前に長期間給与未払い）となってしまった。役員は、社長も副社長も辞任し、実質的な倒産状態。累積債務は6.7億レアル（約202億円）とのことだ。

1947年創業のCultura書店（創業者はユダヤ移民一世）は資本業からスタートし、パウリスタ大通りの本店をベースに中産層の顧客ニーズに合った細やかな顧客対応を売りとした堅実経営を維持していたが、21世紀に入るや全国に支店網を広げ、2007年には本店も大改装し業界第2位の巨大書店となったが、この急成長は10年も続かず、赤字が雪だるま状態に拡大、2018年10月、民事再生を申請することに。全国に20店舗以上まで支店網を広げたが、2022年には、三店舗に集約した。今年2月、民事再生案が却下され、法的には倒産が確定されたが、7月になって、サンパウロ地裁が再生案を承認したことから、パウリスタ本店のみ営業を再開した。

と、二大チェーン書店は崩壊状態であるが、一方、Leitura書店（1967年創業、現在94店舗）のように拡大中の大手書店もあるので、書店業界全般が総崩れというわけではなく、書籍市場は弱含みながら回復基調にある。そうした現情勢を象徴するのが今回盛況のうちに終了したブックフェアであった。

リオ書籍ビエンナーレの概況

2023年9月1日から10日までの10日間、第21回リオ書籍ビエンナーレが開催されたが、出展出版社数は497社、訪問者数は60万人を超え、販売書籍部数は550

万部だったので、単純計算で訪問者一人当たり平均9冊購入したことになる。対面式で開催した最後の2019年は販売部数400万部、限定方式で開催した2021年が250万部であったから、間違いなく、大幅な売上部数増となった。このファクトをみるだけで、「ブラジル人は本を読まない」との広く行われている“俗説”が全く間違っていることが再確認できたといえよう。ブラジル出版市場は平坦な道を歩んではないが、少なくとも連続マイナス成長の“呪縛”からは解放された、と判断しても大丈夫だろう。

また、環境配慮型ブックフェアとして、10日間の会期中、発生したゴミは全て分別回収されたが、その数字は、①ペットボトル 1,238kg、②紙類 8,540kg、③プラスチック 1,367kg、④アルミ缶 1,870kg、であった。

出展出版社別の販売実績

業界紙で報道された出版社ごとの販売実績をみてみよう。Sextante出版は計6万冊を販売、この数値は前回（2021年）比140%増、昨年のサンパウロ書籍ビエンナーレ比で40%増。Globo出版は、前回参加した2019年に比して3倍増、昨年のサンパウロ比60%増。Record出版は、前回2021年比130%増、昨年サンパウロ比50%増。Rocco出版は2019年比135%増。HarperCollins出



▲ブックフェア開会セレモニー

作家 アナ・マリア・ゴンサルヴェス▶

版は、販売部数4万で昨年のサンパウロ比190%増、というようにどこの参加出版社も大幅な売り上げ増を記録している。

開会セレモニーとトークショー参加の作家たち

10日間の期間中様々なトークショーやシンポジウムで多くの作家やアーティストが参加したが、有名どころを列記してみると、漫画家マウリシオ・デ・ソウザ、歴史小説家・劇作家アナ・マリア・ゴンサルヴェス、歴史作家ラウレンチノ・ゴメス、ポルトガル人作家ヴァルテル・ウーゴ・マンイ、俳優ラザロ・ハモスといった方々だ。

開会セレモニーを華やかに盛り立てたのが、エスコラ・デ・サンバボルテラの面々で、最終日のシメを飾ったのが、ブラジル文学アカデミー会員としての女優フェルナンダ・モンテネグロの語り、同じくアカデミー会員のシンガーソングライター、ジルベルト・ジルのミニライブであった。ジルの歌唱でブックフェアを終えるとは、なんともりおらしい、憎い演出だといえるだろう。

作家 アナ・マリア・ゴンサルヴェスと ロングセラー歴史小説 『肌の色という瑕疵』

開会セレモニーをサンバの歌とリズムで華々しくスタートしたサンバチーム・ボルテラの来年2024年のカーニバルのエンヘド（テーマ）は、大河歴史小説『Um Defeito de Cor（肌の色という瑕疵）』（初刊2006年）であることから、その著者である作家アナ・マリア・ゴンサルヴェスが開会式に特別招聘されていた。

開会スピーチで、「ブラジルの書籍マーケットは、最近になってようやく多様化してきたが、依然として南東部出身の白人男性によって支配されており、アフロブラジル女性やLGBTの参加者は少数派でしかない。」と語った彼女は、現役のアフロブラジル女性作家（ミナス出身）としては最もアクティブな社会活動家でもある。その彼女の主要作品といえる大作（全951ページ!）は文学関係者には有名だが一般的にはまだまだ知られていないといえないので、その粗筋を追いかけておこう。というのも、筆者は初版が出た時（2006年）、早速購入して「これは

▶「肌の色という瑕疵」表紙

スゴイ歴史大河小説だ!」と驚嘆しながら10日ほどかけて読了したという経験があるからだ。

身請け解放奴隷から女実業家へ 19世紀のアフリカからバイアへ

まず、この小説のタイトルは、奴隷制時代に黒人が公務員になろうとしても、「肌の色の瑕疵（欠陥）」で拒否されたという当時のご都合主義を皮肉って付けられている。

この小説が扱っているテーマ、時代的背景を列記すれば、奴隷貿易、奴隷労働、奴隷反乱（特に1835年の「マレーの乱」）、元奴隷によるアフリカ帰国運動、であり、舞台となる場所は、ダホメ（現ベナン）、バイア、リオ、ナイジェリア、である。既に老婆となった盲目の主人公ケインジ（ブラジル名ルイザ）が、その驚くべき半生を生き別れた息子に語りかけるスタイルで終始一貫している、歴史大河文学である。

1810年にダホメで生まれたケインジは、8歳の時、奴隷狩り団に襲われ、彼女の母親は強姦され、兄と共に殺されてしまう。彼女は双子の妹と性的陵辱を受けた後、奴隷としてブラジルのバイアへ売り飛ばされる。

ケインジはまず、イタバリカ島の捕鯨場で鯨油汲みをやらされ、その後、大農園主の娘に付添うが、主人に犯され、長男を産む。主人の病没に伴い農園は売却され、主人公はサルヴァドールのイギリス人に雇われ、そこでクッキー作りを覚え、さらにポルトガル語ばかりでなく英語の読み書きも上達していく。

身請けによって解放奴隷となったケインジは、パン屋を開店し、パンやクッキーの製造・販売で生計を立てながら、最初の夫（ポルトガル人）と実質婚をして次男を産む。（この次男が、主人公が全編にわたって語りかける相手である。）

こうしたなかでマレー（イスラム系黒

人）たちとの交流が始まり、奴隷解放ばかりか帝政権力を打倒してイスラム権力樹立を志向する秘密結社の活動を側面援助するようになる。そして1835年1月の「マレーの乱」勃発。千五百人といわれるイスラム系黒人が蜂起した、最大規模の奴隷反乱である。刑務所を攻撃しただけでなく、街路での市街戦も展開したものの、敗北。関係者は絞首刑、鞭打ち、国外追放など過酷な仕打ちを受ける。

主人公は、いったんサルヴァドール市内で隠れ潜んだが、サンルイス（マラニャン）へ、さらにリオ、サントス、サンパウロと漂流、各地で生活力たくましくクッキー焼きはもちろんのこと商才も発揮して経済基盤を築いていく。

権力側からの圧迫もあって、多くの奴隷・元奴隷が西アフリカへ「帰国」するようになるが、主人公は自分で切符代を払ってイギリス船に乗船し、ウイダ（現ベナン）へ。1847年にアフリカに「帰国」した主人公は、葉巻、タバコ葉、カシャサ（蒸留酒）の商売を展開し、事業資金を確保、ナイジェリアで現地人と結婚、女実業家として地盤を固めていく。ラゴスでも息子、娘が生まれ、多くの孫に囲まれる老婆となるが、生き別れた息子を求めて、再度ブラジルの土を踏むべく運搬船に乗船する。

こうしたストーリーを小説として書き上げたアナ・マリア・ゴンサルヴェスはミナス出身で2006年当時は37歳だった。サンパウロで広告代理店を営んでいたが、アパートと共に売却し、バイアへ移住し筆一本の生活を始めた。巻末に50冊以上の参考文献が掲載されており、この主人公のモデルは、19世紀の奴隷解放運動家ルイス・ガマの母親であるルイーザ・マインとされるが、時代考証は大変しっかりしており、ブラジル文学史に残る名作だ。（彼女自身の語りによると、この大著を完成するまで、事前調査に二年、執筆に三年と計5年もかけた由。）

ちなみに、この大著はロングセラーになっており、出版社のHPによれば、現在25刷とのことなので、累計販売部数は2.5万から3万部だろう。

慶應義塾大学国際医学研究会 第46次派遣団のブラジル体験



魚津匠平
(慶應義塾大学医学部 6 年生)

人生最後の夏休みをブラジルに捧げた。私は慶應義塾大学医学部の6年生で、国際医学研究会という慶應義塾大学の公認学生団体に所属している。1978年に設立され、以降医学部6年生の有志3名を夏休みにブラジルへ派遣し続けており、私は第46次派遣団の学生責任者を務めた。今回は、ブラジルフエスで出会った岸和田さんよりお話をいただき、ブラジルへの旅について執筆することとなった。雑誌に寄稿するのは初めてだが、ブラジルを愛する関係者の皆様に少しでも楽しんでいただければ幸いである。

初めてのブラジル

派遣団は毎年3名の医学部6年生と慶應義塾大学病院の医師により構成されている。本年度派遣団は魚津匠平(学生責任者)、北野太晟(会計)、南澤利咲(渉外)、そして慶應義塾大学医学部小児外科の山田洋平先生、以上4名であり、全員にとって初めてのブラジルであった。長時間フライトの末に空港に着くと、長年私たちを支えてくださっているホストファミリー、肥田家の皆さまがお迎えに来てくださっていた。かつて慶應義塾大学病院で研修をしていた日系ブラジル人医師である肥田ミルトン正人先生、奥様の文子さんのお陰で45年前に始まった私たちの活動を、現在その息子さんたちと一緒に支えていただいているのである。オンラインでミーティングを重ねてきた皆さんとついにお会いできた

時には、胸が熱くなった。そしてブラジル初めての食事は、車内でご馳走になったバウン・ジ・ケージョとなった。

シンガー国立公園での眼科検診

私たち国際医学研究会は僻地医療などを通じて医の原点を実体験することを目指すとしており、その活動は多岐にわたる。最初に向かったのは、先住民族が生活している、マツグロソ州のシンガー先住民国立公園である。サンパウロからゴイアニアまで飛行機で1時間半、そこからカナラナまで夜行バスで12時間、さらにセスナで1時間の場所にある、ホンモノの先住民村だ。私はインディオに会いたくて、そしてアマゾン川を見たくて本研究会に入ったのだが、ついにその夢が叶ったのである。セスナは意外にもほとんど揺れず、窓からは蛇行した川と広大な森、点在する集落が見えて、これまでに見た景色のどれとも似つかない美しさに思わず息を呑んだ。飛行機を降りると村人のみなさんが迎えに来ていて、私たちはすぐに村の子供たちに取り囲まれた。見渡すと、頭を赤く染めて肌に黒いペイントをしている男性や、裸で腰に飾りの紐を巻いている子供たちがいる。入れ替わり立ち替わり寄ってきてくれる村人に挨拶と自己紹介を済ませ、彼らに案内されて集落の中へと歩いていくのだが、自分の周りは360度先住民、感動して鳥肌が立った。ついこの間までいた東京とあまりにかけ離れた世界が

広がっていて、同じ地球上であることすら不思議に感じた。まさに別世界である。インディオの文化は政府によって保護されており、村

には限られた人間しか立ち入ることが許されていない。それ故にこの場所では伝統文化が高度に保存されている。

シンガーに来た目的は、村人の皆さんを対象に、眼科検診を行うことである。この場所には交代で医師が来ているが、限られた資源で僻地において医療を行うことはやはり簡単ではなく、必然的に村人が医療を受ける機会は少なくなる。今回日本から持参したデバイスは、スマートフォンに取り付ける特殊なレンズで、簡単に持ち運んで眼科検査を代用できるという優れものである。僻地医療においては、“ポータブル”が重要なキーワードとなるのだ。村の広場にテントを設置させてもらい、昼は検診、空いている時間には子供たちと池で遊ぶ毎日を過ごした。郷に入っては郷に従えということで、亀も食べたし、村人に連れて行ってもらった漁で釣ったピラニアも食べたし、子供たちが持ってきてくれる地面に落ちていた果物も、何でも食べた。特に沢山食べた北野は、村人に大変気に入られて“Imoatat”という名前をもらった。意味は「沢山食うヤツ」である。そうこうして無事に検診を終え、あっという間にシンガーでの日々が終わった。今回の訪問で、インディオが多くの健康問題を抱えているということを知った。スマートフォンに取り付けるデバイスを使ったプロジェクトは始まったばかりであり、今後さらに発展して先住民の皆さんの眼を守るようになることを願うばかりである。コミュニティを何より大切に、お互いに助け合って生きる彼らの生活は、人間がどのようにして生き延びてきたかをよく表していて、これは私にとって本当に大切な学びとなった。



▲左から山田先生、北野、南澤、魚津

▲シンガーでの夕方の水浴びの様子



▲アラカチでの学童健診

が、なんとも可愛いのが、自分の名前だけでなく、“家族”と書いてほしい、お父さんやお母さんの名前を書いてほしいなどお願い

してくる子が多かったことである。家族を大切に、これも私がブラジルで学んだことである。ちなみに、家族よりリクエストが多かったのはネイマールであった。

コロナ禍で実施できなかった期間があったため、健診を初めて受けるという子供たちもいたが、市の職員の中にも、条例で健診の実施が義務付けられていることを知らない人がいた。来年以降も健診が実施されるよう、改めて丁寧に説明を行った。このタイミングで私たちが帯同して検診を行ったことは、きっと大きな意味があったのだらうと感じた。そして何より活動を通じて現地の多くの医師、看護学生、大学職員の皆さんと交流したことは貴重な財産となった。今回健診を受けた子供たちがお父さんお母さんになった時、自分たちの子供にも定期的な健診が必要だと思ってくれたら、そしてその時に当たり前のよう健診が実施され続けていたらこんなに嬉しいことはない。

大都市サンパウロでの活動

シンガーから大都会サンパウロに戻ってからは、病院見学や、現地医学生との会議などをメインに活動を行った。実は私たちはブラジル渡航に向けて1年弱ポルトガル語を勉強しており、ブラジル最高峰の大学であるサンパウロ大学や、サンパウロ州立パウリスタ大学において、日本の医療についてポルトガル語で発表を行った。勉強の成果を発揮して現地の学生にポルトガル語を褒めてもらった時はとても嬉しかった。多民族国家であるからか、明るい国民性のおかげか、きっとその両方だと思うが彼らは僕たちを本当に温かく迎えてくれた。

セアラ州アラカチでの学童検診

次に向かったのはセアラ州アラカチ市である。美しいリゾート地であるカノアケブラーダの小学校では、かつて健康診断が行われていなかった。本研究会が10年前より学童健康診断を開始し、以降継続的に活動を行なったところ、そのことが評価されアラカチ市の条例で学童検診を行うことが義務付けられた。一学生団体の取り組みが遠く離れたブラジルの保健衛生に貢献できた瞬間だった。それ以降は、本研究会が手伝わなくても健診自体は行われるのだが、眼科検診や歯科検診など専門的なものは私たちと現地医師によるチームが帯同しないと行われない。コロナ禍で長期間休校になっていたため今回は4年ぶりの健診であり、3日間朝から夕方まで、合計600名を対象に実施した。私たち学生はポルトガル語で視力検査の説明をしたり、検査機器を操作したりなどしていたが、その合間には必ず子どもたちが「腕に漢字で名前を書いて！」と寄ってくるので休む時間は無かった。やはりタトゥーが好きなのかと思ひながら無心で描き続けていた

最南部リオグランデ・ド・スールへ

アラカチを後にして最後に向かったのはリオグランデ・ド・スール州のポルトアレグレである。この場所ではリオグランデ・ド・スールカトリック大学と、リオグランデ・ド・スール連邦大学を訪問した。実はブラジルの医学生は日本の医学生と違って、彼らは実習の段階から様々な医療行為を行うことができる。問診や採血、救急外来での初期対応などである。これには文化だけでなく医療制度も関係している。ブラジルの医療は無料の保険診療と自費診療に分かれて

おり、日本ほど全ての患者を平等に扱うことが求められていない。保険診療の方は州によってパンク状態の場所もあるのだが、学生は基本的にそういった保険診療の患者を相手に経験を積むのである。学生による診療は、監督の医師がいるため危険は伴わないが、余計に時間がかかる場面もある。無料の保険医療の方がそういった学生の実習も患者さんに受け入れられやすい。さらに、形成外科の実習で豊胸の手術を見学したのだが、話を聞くと、若手の医師が手術を行う代わりに値段を通常よりも安く設定しているとのことだった。これも日本ではなかなか受け入れられそうにないが、経験を積みたい患者にとってもメリットがある。どこで医療を受けても同じ価格を払うという日本のシステムは、日本の中にいると当たり前のように感じてしまうが、一度他国の制度を目の当たりにすると、決してそうではないということがよく分かる。これからの保険医療を担う私たちにとって重要な学びだ。

こうして長いブラジルの旅が終わった。医療を通じて地球の反対側まで行かせていただき、来年医療者になるものとして、そして1人の人間としても多くを学ぶことができた。病気は東京の人もサンパウロの人も、先住民も皆が抱える共通の問題であり、医学は日々グローバルに変化していく。今夏の経験を胸に研鑽を積み、将来はブラジルにまで噂が届くほど活躍することを目指して頑張っていきたい。興味を持ってくださった方は、是非本研究会HPより、第46次派遣団活動ブログもご覧ください。最後に、私たちの活動を支えてくださった全ての皆様方にこの場を借りて御礼申し上げます。



▲サンパウロ大学での医学生会議

シネマ・マージナルの王 オズアウド・カンディアス



布施直佐
(『ピンドラマ』誌編集長)

活動を再開したシネマテーカー・ブラジレイラ

サンパウロ市ヴィラ・マリアーナ地区にあるシネマテーカー・ブラジレイラは、南米最大の映画資料の収集・保存施設で、ここにしか上映プリントが存在しないブラジル映画も多数収蔵されている。ボルソナーロ政権下で予算をストップされ、しばらく休館を余儀なくされていた期間に、火災や水害に見舞われ一時は収蔵資料・フィルムが損失が危惧されたが、昨年2月より新たな運営団体のもとで活動を再開し、現在はブラジルの古典映画の特集上映や海外の著名な監督のレトロスペクティブ等、休館前以上に活発な上映活動を行っている。中でも昨年末に行われた「オズアウド・カンディアス生誕百年特集」はシネマ・マージナル（60年代末～70年代に隆盛した低予算の実験的な映画の総称）の王様の20年ぶりの特集上映とあって多くの若い観客が詰めかけ盛況を博した。

ブラジルのパゾリーニ

オズアウド・カンディアス Ozualdo Candeias (1922-2007、サンパウロ州カジュビ市出身) はシネマ・マージナルの他の多くの監督同様独学で映画製作を始め(本人は1950年代にブラジル南部で頻繁に目撃されたUFOを撮影するために16ミリカメラを購入したと語っている)、何本か短編のドキュメンタリーを作った後、長編第一作「周辺 A Margem」を1967年に発表した。サンパウロ市のチエテ川沿いの貧民区に住む2組の男女の物語を神話的な枠組みで描いたこの作品は批評家に絶賛され、同じく貧民街を舞台にした作品で知られるイタリアの監督になぞらえて「ブラジルのパゾリーニ」と呼ばれた。



▲オズアウド・カンディアス

「バラ」たちの「選択」

カンディアスの監督作品は9本の長編に10本の中短編(「A Margem」以前のドキュメンタリー短編を除く)と非常に寡作であるが、いずれも剥き出しの「性と暴力」を観客に向けて砲丸のように投げつける極めて挑発的な作品ばかりだ。中でも長編5作目となる「選択 又は街道に咲くバラたち Aopção ou As Rosas da Estrada (1981)」はカンディアスの最高傑作と誰もが認める、ブラジル映画史に記憶されるべき作品だ。

ブラジル各地の大農場でサトウキビやカカオの収穫に従事し生計を立てている



▲ Aopção ou As Rosas da Estrada

若い女性たちが、貧困極まりない生活環境に愛想をつかし、街道に出て大型トラックの運転手相手に売春しながらより豊かな生活が待っているはずのサンパウロへ向かう、それが彼女らの「選択」だ。

監督になる以前、カンディアスは長距離トラックの運転手としてブラジル中の街道を数年間駆け回っていた。その時の経験をもとに運転手たちと「バラ」たちの駆け引きを詳細に描いていく(自身も運転手の一人として出演している)。街道に出たばかりのウブでまだ汚れていない新鮮な「バラ」はモーターに連れて行かれるが、街道の埃にまみれて萎れかけた「バラ」は、街道沿いの掘り立て小屋でトラックの整備用の真っ黒なグリースを潤滑剤代わりに手早く事を済ませられその場に捨て置かれる。

実験的なアフレコ

この作品が作られた当時、ブラジルでは撮影後にセリフや環境音を録音する「アフレコ」がまだ主流であったが、カンディアスはこの「アフレコ」を逆手にとり音声における実験的な試みをしばしば行ってきた。たとえば長編第3作の「相続 A Herança (1971)」はシェイクスピアの「ハムレット」をサンパウロの僻地にある農場を舞台に翻案した、それだけでも野心的な作品だが、登場人物のセリフのほとんどを鳥・鶏・犬など動物の鳴き声・唸り声に置き換え重要なセリフは字幕で表示し、観客(あの世にいるシェイクスピアも?)の意表をついた。この「Aopção」はセリフがほとんどない作品だが、登場人物の感情が高まった時や緊迫感がピークに達した場面では猛禽類の耳をつんざくような鳴き声が甲高く響き、強烈な印象を残す。

胸を突き刺す編集

「Aopção」では全体にわたって、複数の「バラ」たちのエピソードを何の説明もなく断片的に繋ぎ合わせつつ、作品の進行ともに「バラ」たちがどんどん疲弊し摩耗していく有り様を非情なまでにあからさまにさらしてゆく。また、現在の自分が、未来あるいは過去の自分を見つめる非常に技巧的なシーンが3回あり、カンディアスの優れた編集テクニックに唸られる。中でもカカオ農場で働く「バラ」が農場から街道に出ると(過去)、街道の向こう側を売春婦になった現在の「バラ」が通りがかり(現在)、通りを挟んで過去と現在の「バラ」が強い眼差しで見つめ合うシーンはカンディアス全作品中の白眉と言えよう。

サンパウロに着いた「バラ」たちを待ち受けていたのは、売春婦が良くてモストリップ嬢として働く今までと変わらぬ過酷な人生であった。さらに「チエテ川の川べりで売春婦が絞殺される」「レズの売春婦、刺殺される」「性器を切り刻まれた売春婦の屍体見つかる」等の見出しとともに写真つきでタブロイド紙の一面を飾り、そのタブロイド紙をゴミ収集人がゴミ箱に捨てる所で作品は終わる。まさにカンディアス、最後の最後まで容赦がない。

中南米査証専門会社として創業35年 株式会社リベルコン・ジャパン



徳田 修
(株)リベルコン・ジャパン代表取締役)

中南米査証の専門会社を目指して

私とブラジルとの出会いは45年前になる。ブラジル系旅行会社に就職したことがきっかけとなった。学生当時、ブラジルに関する知識は乏しく「コーヒー」や「リオのカニバル」程度のものであった。就職活動中のある企業説明会で「当社はアマゾンにもネットワークがある」と聞き、妙にそれが心に残り志望動機となった。思えばそれからブラジルー筋、約半世紀になった。

就職後、私の担当業務は旅行の立案や手配ではなく、業務渡航に関わる就労査証や現地法人の設立、留学査証や永住権の取得などであった。とてもニッチな分野で当時、ブラジル査証を専門業務とする会社は私が知る限り一社も存在しなかった。そこで一般の旅行会社とは一線を画す、ブラジル査証に特化した会社を起業した。

当然ながらブラジル側にパートナーが必要となる。同様の業務を専門としていた日系弁護士会社の「リベルコン社」と業務提携を結んだ。これを機に社名も「株式会社リベルコン・ジャパン」へ変更し、おかげさまで今年創業35周年を迎えた。現在はブラジル以外にもアルゼンチン、チリ、パナマなどの中南米査証や書類認証、翻訳も行い、在日ブラジル人のお客様へ領事サービスの代行や日本への帰化相談にも応じている。また、Jリーグ発足前よりブラジル人プロサッカー選手やコーチ、そのご家族が来日する際の日本国査証の取得や航空券手配もサポートしてきた。

度々の入管法改正

ブラジル入国法令はこれまで度も度々改正されているが、最近の大きな改正と言えば日本国籍者に対して短期滞在査証が免除となったことだ。2016年のリオデジャネイロ・オリンピック開催時において一時的に訪問査証を免除したことを契機に2019年6月17日より正式に査証免除となったものである。この査証免除は日本・ブラジル両政府間の相互免除によるものではなくブラジルの一方的措置であったが、G7広島サミットの際に岸田首相がルーラ大統領から求められていた相互免除の要求に応じ、当面3年の期限付きで本年9月30日より日本もブラジル国籍者に対し短期滞在査証の免除に踏み切り、ようやく相互免除が実現した。これにより両国間のさらなる人的交流が期待されるが、不法滞在者の増加等が懸念される。しかしながら査証免除における滞在目的は相互に限定的であるため、その目的によっては査証が必要となるケース



がある。

ブラジルスタンダード

これまで数多くの査証業務を取り扱ってきたが苦慮したのは、時折ケースバイケースで判断される事例があること。あるケースでは問題なく許可されたのに、同じ内容の別のケースでは許可されない。許可されない方は納得できないが、それを当該機関に説明しても埒が明かない。審査担当官の移動や法令の運用が急遽変更されたことに起因するものである。従って、以前こうだったので今回もこうであろうと考えることは適当ではない。最近では随分システムチックになってきて、逆を言えば以前のようなケースバイケースで特別に扱ってもらうことが期待できなくなってきた。

プロサッカー選手の訪日サポートにおいても様々な問題を経験した。一般的にプロサッカー選手との契約は定められた選手登録期限ギリギリで合意に至るケースが多い。合意と同時に日本査証の手配がスタートするのだがそれは時間との勝負になる。越えなければならない手続きのハードルがいくつもあり、いつもハラハラドキドキ、ブラジルとの時差で昼夜区別なく確認作業が続く。

また、シーズンを終えて一時帰国した選手が次のシーズンに向けて再来日する場合も気が抜けない。当方のスタッフがブラジルの空港で選手を待つのだが、待てど暮らせど選手は現れない。選手とようやく連絡がついたと思ったら、選手から「パスポートが見当たらない」、「母親が急病になった」と言われ万事休す、その日は出発出来ず再手配となった。

後日確認するとそれらはあくまでも口実で、一日でも長く家族と居たいということだった。確かに一時帰国が短期間となってしまうと、家族をととても大切にす彼らの気持ちは理解できなくはない。がしかしである。

アウターコロナ

世界中で人の動きが止まったコロナ禍において当社もかなりの影響を受けた。5類感染症に移行された今、止まっていたプロジェクトは再開され業務渡航も徐々に増えてきた。日本とブラジル、中南米との関係は多岐に渡る。その関係は今後も経済、文化などあらゆる分野において力強く支えられていくであろう。乗り越えなければならない課題は存在するが、お互いになくしてはならないパートナーであることに間違いはない。

当社の豊富な業務経験と正確な情報、質の高いサービスで今後も相互の発展に寄与することが出来れば幸いである。

男女間における 同一労働同一賃金

本誌 2023 年 3 月 1673 号で紹介したとおり、ブラジルの労働法分野では、近年女性の就労支援やハラスメント防止が大きなテーマとなっている。そして、その文脈で、男女間の同一労働同一賃金を定めた同一賃金法（2023 年法 14611 号）が 2023 年 7 月に公布・施行された。本稿では同法の内容を紹介するとともに、併せて労働分野に関する最近のトピックを紹介する。

1. 同一賃金法の概要

(1) 同一労働同一賃金の再確認及び罰則

同一労働同一賃金は、男女間に限らず、すべての労働者に適用される形ですでに労働法に規定されていたが、同一賃金法は、男女間の同一労働同一賃金を改めて確認する目的で制定された。また、労働法では、性別又は民族を理由とする賃金差別が禁止されること及び違反した場合の罰則が社会保障金の給付上限の 50% となることが規定されていたが、同一賃金法は、それを改正し、性別、人種、民族、出自又は年齢を理由とする賃金の差別が禁止されること及び違反した場合の罰則が被差別労働者に支払う新たな賃金の 10 倍となるとした（違反が繰り返された場合にはさらに 2 倍になる）。なお、仮に雇用主が被差別労働者に給与の差額を支払ったとしても、被差別労働者の慰謝料請求権は失われない。

(2) 男女間の同一労働同一賃金を保証するための措置

同一賃金法は、男女間の同一労働同一賃金を保証するために雇用主が以下の措置を講じることを義務付けている。

- ① 賃金の透明化及び報酬の支給基準の仕組みの確立
- ② 男女間の同一労働同一賃金に関する告発を受ける窓口の設置
- ③ 労働市場における男女平等をテーマとした労働者に向けたダイバーシティ及びインクルージョン・プログラムの促進と実施
- ④ 男性と平等な条件で労働市場に参入・維持・昇進できるよう、女性に対する訓練・教育の実施

(3) 報告書の公表及び行動計画の提示

労働者 100 人以上の企業は、個人情報保護法に反しない形で、給与の透明性と報酬の支給基準に関する報告書を 6 カ月ごとに公表する必要がある。報告書には、匿名化された形で、給与、報酬、管理職の男女比率を示す情報を記載し、また、人種、民族、国籍及び年齢に基づく差別が発生する可能性に関する統計データを記載する必要がある。

また、不平等な給与又は報酬の支給基準が確認された場合、雇用主は、労働組合の関与を保証したうえで、目標及び期限を定めた不平等を緩和するための行動計画を提示し、実施しなければならない。



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

上記義務に違反した場合、当該月の全労働者の給与総額の 3% の行政罰（最低賃金の 100 倍を上限とする）が課せられる。

2. その他のトピック

(1) 労働組合扶助費に関する連邦最高裁判所の判決

2017 年の労働法改正により、労働者の同意なく、労働組合の組合費 (Contribuição Sindical) を労働者の賃金から天引きすることが禁止された。一方、組合費とは性質や使用目的が異なる組合扶助費 (Contribuição Assistencial) というものが労働協約に規定されていることがある。この組合扶助費について、2023 年 9 月、連邦最高裁判所は、自らの過去の判例を変更し、労働者がその支払いを拒否する権利が保障されていれば、労働協約や労働協定が、組合員であるかは問わず、あるカテゴリーに属する労働者すべてに適用される形で組合扶助費を定めることは合憲であると判断した。なお、組合扶助費がいつ請求されるのか、労働者がどのように反対の意思表示を行うのか等のルールについてはまだ明らかになっていない。

(2) 週休手当

ブラジル労働法には、週休手当 (Descanso Semanal Remunerado) という概念がある。週休手当は、1 週間の決められている日数を休まずに勤務すれば 1 日分の手当がもらえるという制度である（そのため、給与は 30 日分支払われることとなる）。時間外労働が発生したときは追加の週休手当が発生し、それは、月の時間外労働手当額 ÷ 営業日（勤務日数 + 土曜日の回数）× 非営業日（休日日数 + 祝日日数）で計算される。高等労働裁判所 (Tribunal Superior do Trabalho) は、常習的な時間外労働に基づく週休手当額が、13 か月目の給料、FGTS、有給休暇手当等の計算に含まれると解釈を変更した。この変更により人件費の増加につながる可能性がある。新しいルールは 2023 年 3 月から適用されている。

(3) 食費手当・食料手当

ブラジルでは、一般的に、レストラン等で食事代に使える食費手当 (Vale-Refeição) やスーパー等で食料品の購入に使える食料手当 (Vale-Alimentação) が労働者に支給される。この食費手当や食料手当に関するルールが 2022 年法 14442 号により変更された。一般的に食費手当や食料手当は第三者の業者が提供するサービスが利用されるが、同法は、雇用者がそのような業者から契約金額の割引を受けたり労働者の健康や食料確保に関係のない便益を受けることを禁止した。また、労働者は、食費手当や食料手当を提供する別の業者に自らのクレジット（手当の残高）を自由に移行できるようになった。

通関における コンプライアンス及び 優遇制度の概要



マルコ・クアドロス
(KPMG ブラジル タックス
パートナー)



天野義仁
(KPMG
ブラジルジャパン
デスク責任者)



三上智大
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)

ブラジルで事業を行う企業のなかで、特に製造業に携わる企業は多くの資材を輸入に頼っている。そのため、資材の差し止めやペナルティーを防止する観点から通関に係る法令や規則に対するコンプライアンスの遵守に神経を尖らせている企業も多く見受けられる。

当該記事では、輸入に関する規制に関して新たに発令された法令に関する概説と、通関手続きの円滑化や輸入に係る税負担の低減に繋がる既存の優遇制度について説明したい。

輸入申告 (DUIMP) における商品カタログの導入

商品カタログは税務当局により省令 COANA 77 号 /2018 の発令によって 2018 年から段階的に導入され、2024 年に予定されている DUIMP の導入完了をもって、全ての輸入品目に関する詳細な仕様の情報提出が義務付けられる予定となっている。これにより、輸入品の商品カタログへの登録を通関手続きの前に行う必要性が生じるようになる。

この新たな提出義務により、企業は申告に必要な情報の収集により多くの時間を要することが想定されており、また提出した情報に誤りがあった場合にはペナルティーが科されることから、細心の注意を要するコンプライアンス事項となる。そのため、企業への財務的影響がないよう、当該義務の遵守を支援するツールの導入や提出前に第三者によるレビューといった対応を検討する必要がある。

REINTEGRA 制度

輸出企業に対して連邦税の還付を行う優遇制度 [REINTEGRA] は、税務クレジットを付与することでバリューチェーンにおける税負担の軽減を行っている。現行制度は 2015 年の通達 8415 号 /2015 により規定されており、税務クレジットは制度の対象となる輸出品の金額の 0.1% が付与され、連邦税との相殺又は還付を行うことが可能となっている。また、以下のケースにおいて税務クレジットの税率引き上げ又は付与対象を拡大することが可能：

- a. 企業が法律で定められた一定の基準を証明できる場合、2.1% に引き上げ
- b. ZFM (マナウスフリーゾーン) 向けの国内販売を行っている場合、ZFM 向けの国内販売を輸出と同等のオペレーションとして扱うべきとした 2020 年 2 月 18 日の STJ (高等裁) 判決により、一定の条件を満たせば ZFM 向けの販売金額を税務クレジットの付与の対象とすることが可能

Ex-Tariff 及び LETEC

ブラジルでは輸入において課税される税金の一部の減免を可能と

する制度が複数存在し、そのなかで最も一般的に知られているのが Ex-Tariff である。同制度は 2019 年の経済省 省令 309 号及び 324 号により導入され、メルコスール域内 (TEC) 及びブラジル国内 (TIPI) で技術又は資本財として認められる品目に対して輸入税の軽減を可能とする。その他の品目に対しては、通達 GECEX 272 号 /2021 を根拠とする LETEC (対外共通関税率表の例外品目リスト) を利用した軽減措置を検討する余地がある。当該制度では化学、ヘルスケア、農業、自動車といった様々なセクターで使用される原料に対する輸入税の引き下げを行うことが可能である。

特別関税制度 (ドローバック、RECOF)

当該制度はブラジル産製品の国際市場での競争力向上を目的として、工業化と輸出を目的とした資材の購入において、税金 (II、PIS / COFINS、IPI、ICMS) の免除を付与している。また、資材の輸入のみならず、国内市場で購入した資材も同制度の適用を受けることが可能であり、さらに過去 2 年間に行ったオペレーションに対して遡及的に適用することも認めている。これらの制度のなかではドローバック制度 (法令 37 号 /1966 により制定、法令 11945 号 /2009 により改正) と RECOF 制度 (通達 6759 号 /2009 により制定、規範指令 2126 号 /2022 により改正) が最も一般的であるが、他にも特定のセクターに焦点を当てた特別制度が設けられている場合がある。

AEO プログラム

AEO (Authorized Economic Operator) 認定事業者制度は 80 カ国以上で導入されているプログラムで、ブラジルでも運用されている。同プログラムの認定を受けた事業者は、物流、保管、在庫に関連する様々なコストの削減を受けることが可能となり、また通関手続きでも様々な恩恵を享受できる (例：船舶が港湾に到着する前に通関手続きを開始可能)。さらに、ガバナンス上のベストプラクティスを保証していることから、ESG の観点からも好影響を受けることが可能である。2023 年 5 月時点で 544 社が認定を受けており、ブラジルの輸出入総額の 27% が AEO 制度を通じて行われている。

このように、ブラジルでは様々な優遇制度が存在しており、その適用により企業のブラジルコストを緩和することが可能となっている。一方で、税務当局から要求される適用条件や文書化が厳格である場合もあり、実際の運用に際してのハードルを高めるケースも存在する。将来的には法改正による適用条件の緩和を期待しつつ、企業におかれては各制度の適用可能性について検討することが重要といえる。

音楽、お芝居を通じて… 日本とブラジルの物語を伝えたい



小川善久
(関漢和塾代表取締役)

音楽で繋がったブラジル

1987年にポルトガル語学科を卒業するも関わりはないまま、2005年に銀座で中国語の研修会社を設立した私が、改めてポルトガル語に関わり、ブラジルに初めて足を踏み入れたのは2014年のこと。日本の企業向け語学研修、その後現地での語学活用状況を視察する為のブラジル出張から始まった。とある企業の進出に伴って訪ねたポルトアレグレ、そこで開催されていた日本祭りのステージに立つことになったのが、音楽を通してのブラジルとの関わりへの第一歩である。

出演のきっかけは、高校時代にレコードを出したという「昔取った杵柄」の話題から推薦いただく。5年後の2019年には場違いにもサンパウロの日本祭りのステージに昇格、同じ年にはペレン・トメアス・マナウスを訪ねる故郷めぐりツアーにも帯同、各地で移民の方の歴史を綴ったオリジナル曲「この地に舞い降りたのは…」を披露した。本業は企業の語学研修だが、気が付けばどっちが主かわからなくなる？それでも移民の方々が私の曲に涙してくれる…私の方が感動した。

4年ぶりの日本祭りに参加

翌年の2020年には、サンパウロ、ポルトアレグレに加えて、移民の方々のお誘いでグアタバラという町にも歌に行く予定だったが、忌まわしいコロナ騒ぎが巻き起こった。当初はリオのカーニバルも普通に行われていたが、世界的な偏向報道、特に日本のメディア、政府の捏造は甚だしく、気が付けば三年も行動規制が続き、出張は諦めざるを得なくなった。途中オンラインで参加するもCDまで作った私の楽曲を

直接お伝えする機会は丸三年間も閉ざされてしまった。

が、4年前に知り合った和歌山県人会のジョゼ谷口氏のご尽力で、2023年7月、私はサンパウロ日本祭

りのステージに再び立っていた。15分2曲のステージ、州知事の到着が遅れて順番が前倒しになり化粧(笑)もせずに歌うことになるも実にありがたい話。そもそもアマチュア歌手の私がブラジルと歌で繋がることができたのは、ポルトアレグレの和田氏、サンパウロの山田氏、そして谷口氏のおかげ。これからも「歌」を通じて日伯交流に貢献し続けていきたいと思う。

コロナ禍に俳優への扉を叩く

そんな私のコロナ禍の三年間は、指をくわえて収束を待っていたわけではなかった。オンライン化の恩恵もあり余った時間で、なぜか芸能事務所の門を叩き、歌に加えてお芝居の世界に飛び込むことになる。55歳を過ぎてオーディションに果敢にチャレンジ、5度の舞台や小芝居風花さんや檀れいさんと映画で共演することに。(2024年公開予定「レディ加賀」)映画の世界に初めて飛び込み、ふと思いついたことが、2014年にサンパウロでホームステイした移民の垣添恵子さんのことだ。

この7月も滞在させてもらったが、13歳でアマゾンのペルテラに移住した彼女もすでに80歳を超えている。2014年に2週間のホームステイで毎晩3時間は聞かせていただいた壮絶かつ感動の移民当時のお話。映画の世界に携わったばかりの私は一瞬にして、彼女の物語を世に残す映画を撮りたいと思ってしまった。移民の歴史の語り部は彼女だけではない。もちろん皆さんの物語をすべて残せるわけではないが、彼らの生き様を残すのも私ができる使命？そんな大それたことを考えている。

移民の方の映画を作りたい！

この文章を書いている段階では、まったくの夢物語だが、せっかくのブラジル出張をドキュメント映画作成の為の準備にしたい。幸いにして、芸能活動を始めたら映画のプロデューサーや役者さんに会い、もちろん私も演技は磨いて出演希望、映画が実現したら主題歌は私(笑)、語学のお仕事から繋がったブラジルと日系ブラジル移民、貴重な体験を残すことができたなら…そんな私も時間はないが、五体と五感が続く限り歩み続けたい！すっかり自分の想いの吐露になってしまったかな？

ブラジルとの関わりは駐在等で活躍された方に比べれば、まだまだ10年目の駆け出し。それでも15回の出張で主要な都市を巡り、駐在員に限らず、現地で色んな方にお会いした。2016年にはリオのオリンピックの開幕式も見た。「事件は現場で起きている」と常々言っているが、時間とお金の許す限りこれからもブラジルに足を運びたい。こんな私でも足を運んだなら語学、音楽、お芝居を通じて少しでもブラジルの人々と日本をつなぐ役割を果たしたい。それが私のライフワークかも知れない。



魁聖(友綱親方)の断髪式

「ブラジル特報」編集部

10月1日(日)、両国国技館にて、ブラジル出身力士としては最高位の関脇まで上り詰めた魁聖の引退断髪式(正確には、魁聖引退友綱襲名断髪式)が執り行われた。当協会からは、岸和田仁常務理事(弊誌編集人)が参加したので、この引退セレモニーについてざっくりと報告しておきたい。

もっとも、生まれて初めて断髪式なるセレモニーに参席したので、最初から最後まですべてが物珍しく、2時間近く続いた、相撲力士の“現役からの定年退職式”を小学生の如く面白がって見聞したにすぎないのだが。

セレモニーは、NHKアナウンサーの司会進行で滞りなく進められたが、断髪ハサミを入れた参加者は、およそ340名で、最後の止め鉢は浅香山親方(元大関魁聖)が執り行った。

断髪式終了後のパーティーでは、本人とも短い時間ではあったが会話を交わすことができ、当協会の年末フェスタに来てね、と念を押すこともできたが、ブラジルからかけつけた母親(ロザーナさん)とも数分だが立ち話を交わせたのは実に嬉しい体験であった。来日は二回目で前回は2014年だったとのことであったが、魁聖の背が高い(身長195cm、

体重200kg)のは母親ゆずりであることが確認できたし、なによりも彼女のブラジル人らしい落ち着いた多文化受容精神には感心してしまった次第だ。

ここで、魁聖について要約的にメモしておこう。

1986年、サンパウロで生まれた日系三世(父親が日系二世、母親がドイツ・イタリア系)、本名リカルド・スガノが、来日したのは2006年であったが、2008年には幕下へ昇進、2010年に十両、2016年に新三役小結、同年の7月場所で関脇へ、その後怪我などで苦しい時期が続いたが、16年間相撲力士として活躍したのであった。三回も敢闘賞を受賞していることもあって、力士として数多くの魁聖ファンを魅了し続けたことはよく知られている。そんな魁聖も体力に限界を感じるようになって、2022年8月、現役を引退することになった。今後は友綱親方として後輩の育成指導にあたることになるが、当協会としては引き続き精神的支援をフォローしていきたい。頑張れ、友綱親方！



▲鉢入れを終えて
魁聖に語りかける母親ロザーナさん

ジャーナリストの旅路

ブラジルで触れた「移民社会」途切れぬ縁の始まりは足元に

戸田和敬
(朝日新聞大阪本社社会部)

「あなたの地元も、ウチナンチュ(沖縄人)が多いよね」。ある高齢男性からこう言われたのは6年前、サンパウロの邦字紙で記者生活を始めたころだった。当時24歳の私は、地球の反対側にある日系の移民社会で、まだ知らなかった日本の文化や芸能に触れ、自分が育った地域についても考えをめぐらせた。

サンパウロでは毎週末、現地を拠点に日系団体が主催するイベントを回った。着任した当初、沖縄系移民による「おきなわ祭り」取材した。日系人らのグループが琉球空手や伝統芸能のエイサーなど特有の文化を披露する姿が印象深い。沖縄コミュニティでは、文化を次世代に伝えていく活動が盛んに行われていた。

沖縄からブラジルへの移住110周年を記念した祝賀行事にも立ち会った。世界中のウチナンチュが一堂に会し、伝統芸能を披露して盛大に祝う姿には、ルーツへの強い思いが表れていた。

地球の反対側での経験から、今春に赴任した大阪で、大阪市大正区の「リトル沖縄」を訪ねた。沖縄出身者が多いこの地域にも、サンパウロと同様の沖縄コミュニティがあった。私が沖縄系移民との交流について話すと、ブラジルとの縁を持つ人たちが繋がっていった。

「子どものころにブラジルにおったんよ」「親戚がブラジルで地方議員をしとったらしいわ」「先祖がブラジル行きの最初の移民船に乗ったんだ」……。

日本での記者生活においても、ブラジルとの縁が途絶えることはなかった。帰国後に赴任した静岡では、日本最大のブラジル人コミュニティがある浜松市で言葉や習慣、働き方の違いなどに苦しむ日系2～4世の話を聞いた。異動した先の広島では、ブラジルの親戚から届いた手紙や写真を大切に残す女性に会い、国内最多の海外移民を送り出した「移民県」の名残に触れた。

どこへ行っても、ブラジルや移民社会に縁を持つ一人として会話ができたことは、私の強みであり、支えになっていた。そして、私の故郷である兵庫県尼崎市にも、サンパウロの男性が言ったように沖縄出身者がたくさんいた。

振り返れば、私の周りには沖縄にルーツを持つ友人が何人もいた。小学5年時の運動会で、私の学年が取り組んだ演目はエイサーだった。これだけ身近なところに移民社会の一端があったことに、ブラジルで記者になるまで気が付かなかった。地球の反対側との途切れぬ縁の始まりは、意外にも自分の足元に広がっていたことを思い返した。

アマゾンを再考するための必読書二冊 (復刊『アマゾン探検記』、新刊『アマゾン500年』)を読む

岸和田仁 (『ブラジル特報』編集人)

ハーンドン『アマゾン探検記』 (泉靖一訳、河出書房新社)

1854年に刊行された原著を読んで衝撃的な刺激を受けたため、アマゾン渡航を衝動的に計画してニューオルリンズに向かったものの、ブラジルに向かう船が見つからず、そうこうしているうちに手持ち資金も尽きてしまい、知り合いになった水先案内人から仕事をおしえてもらって自身も水先案内人に転じた、という「わが生涯の転機」を語ったのが、後の文豪マーク・トウェインであった。アマゾンに惹かれた彼が21歳の時、同じ大河でもアマゾンでなくミシシッピーへ“転向”したおかげで、のちに『トム・ソーヤーの冒険』はじめてとする作品群を生み出すことになるわけだ。

間接的にアメリカ文学を面白くさせるきっかけをつくった名著『アマゾン探検記』は、米国海軍大尉だったハーンドンが海軍大臣の命令に従ってアマゾン河全流域の事情調査・情報収集を1851年に行ったが、その調査報告書であった。ペルーのアマゾン上流からブラジルの河口までの、アマゾン河調査レポートでありながら、読み物としても民俗誌としても高く評価され、多くの読者を獲得することになる。

この抄訳が『世界探検全集 06 アマゾン探検記』として河出書房新社から刊行されたのが1977年であったが、昨年11月に同社から復刊された。筆者も読み始めたら、面白くて一気に最後まで読み進むことになった。中流域のマナスがまだ都市にもなっていなかった時代の、各地の先住民、混血住民の風俗、食文化などが詳しく書かれているからだ。アマゾン奥地の金持階層は欧州から輸入したシャンペンやらポルトガルワインやらイギリスビールを飲み、庶民は、ファリーニャ(キャッサバ粉)と塩干魚ないし時に塩干牛肉を食べ、ハーンドンもほぼ同じものを食していることなどが几帳面に記録されている。

この170年前に書かれたアマゾン民俗誌の邦訳版は熟読に値する内容を有しているが、とにかく面白い、と強調しておきたい。

丸山浩明『アマゾン500年』 (岩波新書)

ドット・コムではない本来のアマゾンに関する一冊といえば1992年に刊行された岩波新書『アマゾン 生態と開

発』が今でも読み継がれている名著だ。理学博士・気候学者(西沢利栄教授)と経済学者(小池洋一教授)の共著であるが、「アマゾンには熱帯夜はない」とか身近なテーマを取り上げながら、アマゾンの環境と生態について実に具体的に解説したうえで、一般書としては初めてアグロフォレストリーを取り上げた。アマゾン農業開発の“第三の道”ともいえるアグロフォレストリーが、日系移住地トメアスにおいて試行され開発されてきた経緯も図解入りで叙述されており、最終章における「アマゾンの環境問題は、日本・日本人に対する問いでもある」との問いは今でも有効だ。

この西沢教授(故人)らが1980年代に学際的に実施したブラジル・ノルデスチ現地調査に院生として参加したのが、8月に刊行された岩波新書『アマゾン500年—植民と開発をめぐる相剋』の著者、丸山浩明教授であった。

地理学者として丸山教授はこれまで、ノルデスチ乾燥地域(『砂漠化と貧困の人間性—ブラジル奥地の文化生態』古今書院)、パンタナール(『パンタナール—南米大湿原の豊饒と脆弱』海青社)、ブラジル日本移民(『ブラジル日本移民—百年の軌跡』明石書店)についての事例研究書を発表してきたが、今回の新書は、「多国間のグローバルな関係性」という歴史的文脈のなかにアマゾン位置付けるべく書き上げられた歴史地理学の試論的力作である。

序章で環境・地理を復習してから、第1章(ヨーロッパ人に「発見」されたアマゾン)、第2章(アメリカの進出と南欧移民の導入)、第3章(ゴムブームの到来とイギリスの策動)、第4章(過熱する日米の覇権争い)、第5章(第二次世界大戦とアマゾン)、終章(アマゾンの「現代的風景」)、と、ポルトガルの先住民政策、ブラジル政府による北東部旱魃難民の強制移住政策、米国の南北戦争で敗北した南軍関係者の流入、ゴムブーム、日系アマゾン移民、アマゾン開発の現状、等々につき、凝縮された叙述が続く。

評者も知らなかった史実が次々と明らかになっていく筆さばきには感心しながら読み進むことになったが、特に、19世紀に自国国境を急拡大した米国の南進論の一環といえる、海軍士官・海洋学者モーリーによる「アマゾン共和国」構想を支援し、その広告塔となったのが、上述したハーンドン『アマゾン探検記』であった、という指摘には目から鱗が落ちた。米国の黒人奴隷制支持者モーリーが構想したことは、米国内の黒人奴隷をアマゾンに移転して「アマゾン共和国」を樹立させることで黒人問題を解決しよう、というもので、まさにレイシスト的主張であったからだ。

新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『女囚たち ブラジルの女性刑務所の真実』(D・ヴァレーラ著、伊藤秋仁訳) 映画化されたベストセラー『カランチル駅』の続巻として書かれた本書ではサンパウロの女性刑務所の実相が“生々しく”記述されている。著者はサンパウロ大医学部卒の刑務所医官にしてTVコメンテーターとしても著名な作家。「ブラジルの刑務所は貧困層を取り巻く社会の縮図」であるが、毎日2万食を準備する調理場は産業給食工場並みの清潔さと迅速さで機能している事実も記録されており優れたノンフィクション作品として読むべきだろう。(水声社 2023年8月 304頁 2,700円+税)

『アマゾン500年』(丸山浩明著) 「多国間のグローバルな関係性」という歴史的文脈のなかにアマゾン位置付けるべく書き上げられた歴史地理学の試論的新書。長年に亘る現地調査と

文献調査をふまえているだけに、濃密にして説得力ある文章が続く。ポルトガルの先住民政策、ブラジル政府による北東部旱魃難民の強制移住政策、米国の南北戦争で敗北した南軍関係者の流入、ゴムブーム、日系アマゾン移民、アマゾン開発の現状等々、知られざるアマゾンの国際性に驚くだろう。(岩波新書 2023年8月 268頁 1,060円+税)

『アマゾン探検記』(W・ハーンドン著、泉靖一訳) 米国海軍への報告として発刊された(初版は1854年刊行)、アマゾン河の源流地域(ペルー・アマゾン)から河口(ベレン)まで流域全般に関する調査報告書であるが、史料的価値の高い民俗誌にもなっている。この原著の抄訳(1977年刊)の復刊であるが、探検家関野吉晴氏の解説が付されている。各地の住民と同じ食事を食べ、カヌーや二本の足で行動する海軍大尉(著者)は、人類学者のセンスを有しており、現代人が読んでも実に興味深い。(河出書房新社 2022年11月 294頁 2,300円+税)

『移民船から世界をみる』(根川幸男著) 移民史研究における“未開拓分野”と

いえる移民船そのものの事例研究であり、明治維新期の初期移民船から戦後南米移民へ参入したオランダ船の事例まで、一次史料を読み解きながら移民たちの船上体験も具体的に叙述している。学術論文調というよりも読者目線のノンフィクション文体で一貫しており、科研費研究「近代日本人のグローバル移動と動植物交換をめぐる文明史的研究」の成果でありながら一般読者も惹きつける作品に仕上がっている。(法政大学出版 2023年7月 308頁 3,800円+税)

『リスボン大地震』(N・シュラディ著、山田和子訳) スペイン在住の米国人作家が歴史ドキュメンタリー風に詳細に描いた、優れた大地震解説本。1755年11月1日、推定マグニチュード8.5の大地震がリスボンを襲い、地震・火災・津波がもたらした複合災害(死者は3万とも6万とも)は欧州史上最悪のものであった。18世紀の欧州知識人層に与えた哲学的インパクトの結果、「自然災害の中心にあるのは、天の摂理でも形而上学でも生きている神の怒りでもなく、人間だということにつきる」と。(白水社 2023年9月 288頁 3,800円+税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

Feminicídio

今回は、インターネットサイトBBC NEWS BRASILの『Feminicídio: 4 mulheres são mortas por dia no Brasil — por que isso ainda acontece com tanta frequência?』と題する記事を取り上げる。性別を理由とした女性または少女に対する殺人を意味するフェミニサイド(Feminicide)という言葉があり、そのポルトガル語がfeminicídioだ。

BCの記事は、ブラジル治安年報(Anuário Brasileiro de Segurança Pública)によれば、ブラジルでは、6時間に一人の割合で、女性が殺害されていると報じている。2022年のフェミニサイドの総数は、ここ数年の増加傾向に歯止めがかからず、1,437件で2021年の1,347件から、6.5%増加、記録を更新した。

専門家は、フェミニサイドの背景には、女性は男性の従属物/所有物であり、その意思や行動は、男性の思う通りでなければならないとするマシスモやセクシストの文化(cultura machista e sexista)があると指摘する。

治安年報は、また、ブラジルでは、フェミニサイド10件のうち、7件は、女性の自宅内で起きていると指摘している。加害者は、大半のケースにおいてパートナー(53.6%)、元パートナー(19.4%)だった。その他、家族(息子、兄弟、父親)(10.7%)、知人(8%)と続き、まったく知らない人は、8.3%だった。

専門家は、加害者は、交際の終了を認めず、あるいは、二人の関係の中における女性の自立を認めないということが多くいと説明する。そ

れゆえ、加害者は女性に近い男性というのが大半のケースだ。被害者の年齢構成では、18歳から44歳が全体の71.9%を占め、その中で、18歳から24歳が16.1%と最多であった。専門家は、若い人は人生経験が少なく、相手の男性の言動の中に将来フェミニサイドにつながるような小さな芽を見つけることができないからだとして説明する。記事の最後では、男性の日頃の言動や激しい感情の起伏等フェミニサイドにつながる兆候の発見の仕方や警察への相談方法なども詳しく説明している。

先日、たまたまJornal Nacionalを視ていたら、フェミニサイドをかなりの時間を割いて取り上げていた。最近は、ITを活用した様々な対策も講じられているとして、連邦区高裁(Tribunal de Justiça do Distrito Federal)等が中心となり開発したViva Florという携帯アプリを紹介していた(写真ご参照)。緊急時に携帯画面のボタンをタップするだけで、警察が駆け付けるというもので、女性にとってかなり心強いものだ。

一方、最近、日本でも、DV(交際相手や妻への暴力)に対する関心が高まり、また、女性に対する交際相手などからの暴力が殺人に至った事件がけっこう頻繁に報道されている。フェミニサイドという言葉も使われたしたが、その社会的認知度は高いとは言えないのが現状のようだ。(MK)



携帯アプリ Viva Flor

水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

CHALLENGE

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

CAFÉ
**FAZENDA
ALIANÇA**
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市（サンパウロ州の中央部）で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書（レインフォレスト・アライアンスとUTZ）を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店
ミカド珈琲店 日本橋本店
ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店
ミカドコーヒー 軽井沢旧道店
ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店
ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)
株式会社ミカド珈琲商会
サザコーヒー筑波大学アリアンサ店
オンラインストア<https://mikado-coffee.com>

住所
東京都中央区日本橋室町1-6-7
東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア
長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2
長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798
長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707
東京都港区三田2-21-8
茨城県つくば市天久保3丁目1

エミレーツ航空が、
南米を近くする。

リオデジャネイロ*
サンパウロ

ブエノスアイレス

FLY BETTER

エミレーツ航空は、サンパウロ、リオデジャネイロ*、南米のブエノスアイレスを含む全世界150以上の都市に就航。
シームレスな乗り継ぎで、よりスムーズで快適なビジネストラベルをお楽しみください。

ワンランク上の空の旅へ。エミレーツ・ビジネス



*リオデジャネイロへのフライトは、2022年11月2日より運行開始。



Leading
You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様に万全のサポートをご提供しています。

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

NISHIMURA
& ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon

*1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

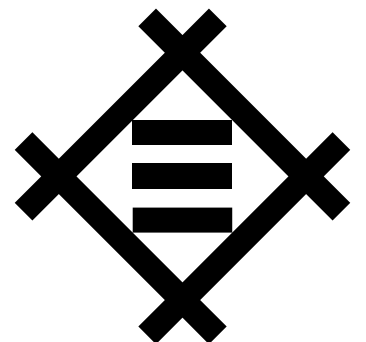
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUMI & CO.